データウェアハウスの動向と三菱“DIAPRISM”のコンセプト

樋口雅宏*　斎藤　巧+
西崎　亨**
伏見信也***

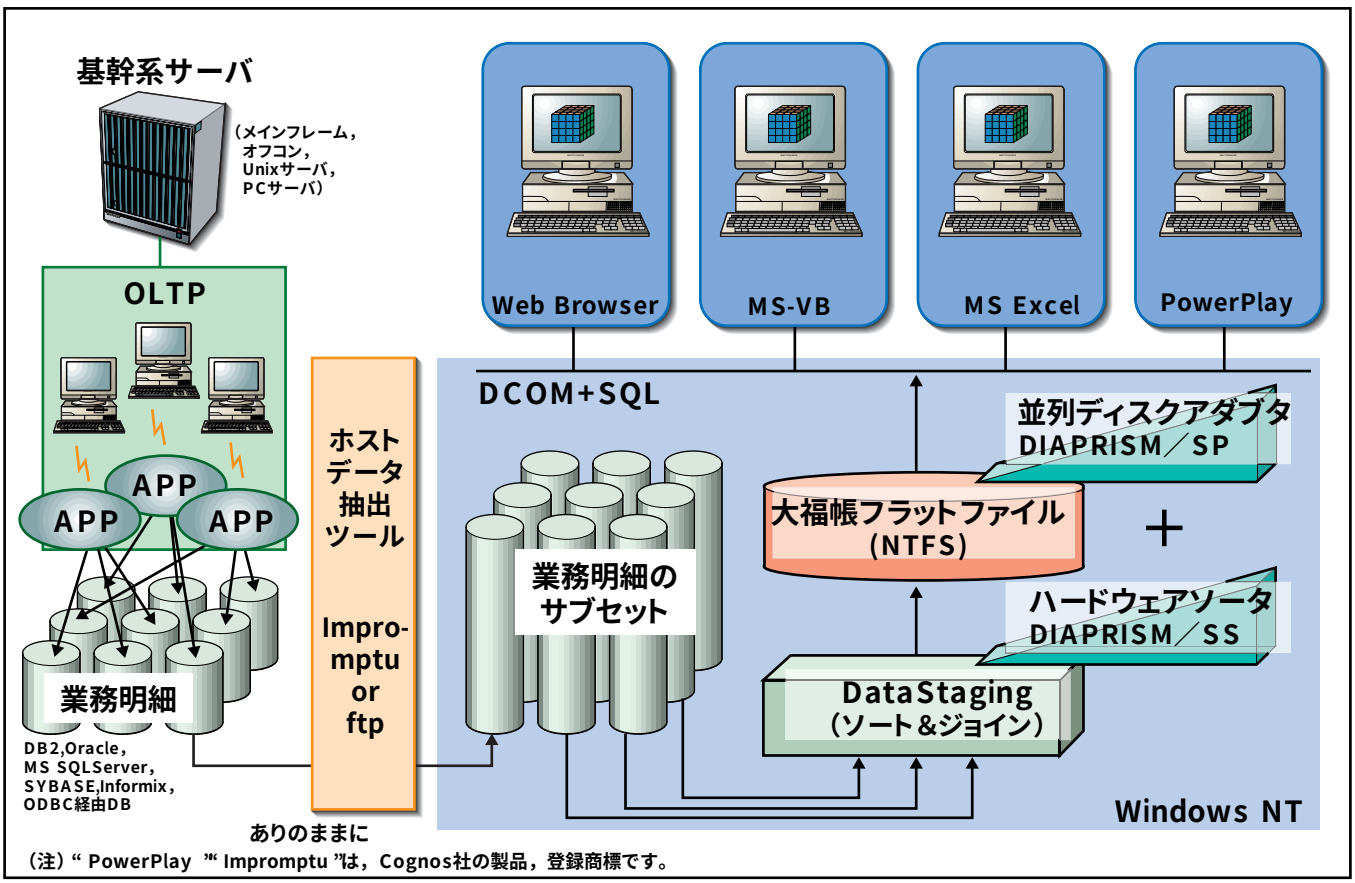
要　旨

データウェアハウスは，企業内システムのデータの有用性を高め，データ活用の向上と情報システムの成果効率を増すための情報系システムである。基幹業務システムと電子メールやグループウェア等の情報系システムの間に設けられたもので，そのコンポーネントは，基幹データ，外部データ，データウェアハウス，データマートの四つである。データウェアハウスは略してDWHという。DWHは企業情報システムの最新のパターンである。

低成長時代の今，企業の経営戦略遂行においては，ポイントを絞った経営投資と素早い意志決定が求められる。そのため，企業情報システムはデータ活用の向上と成果効率の迅速な把握が必要であり，DWHに求められる期待は大きい。

しかし，現在のDWHの構築には，高度な技術と成果を求めるには多大な情報化投資が必要となっている。また，その結果構築できたシステムにも，まだまだ改善すべき点が含まれている。

三菱電機では，オフィスコンピュータ時代から培ってきたデータベース処理技術を活用したデータ処理用プロセッサ“DIAPRISM”をWindows NTサーバに接続することにより，簡単に導入でき，高速で，自由度の高い，コストパフォーマンスが良いDWHシステム構築が実現でき，さらに，このDIAPRISMを活用した分析業務ソリューションを提供する。



（注）“PowerPlay”“Impromptu”は，Cognos社の製品，登録商標です。

DIAPRISM製品アーキテクチャ

DIAPRISMは，基幹業務システムからありのままのデータをもらい，データ処理専用プロセッサの高速性を活用しながら，安価で柔軟性の高いデータマートシステムを実現することを目的としている。現在のDWHのアプローチとは全く異なる手法ではあるが，インタフェースはオープン化されているので，各種ツールとの連携も簡単に行える。

*情報システム製作所システムプロダクト事業センター副センター長　**同製作所同センターサーバプロダクツ部販売推進課長　***同製作所同センター同部DIAPRISM技術課長（工博）　+同製作所同センター同部次長